

福竜丸だより

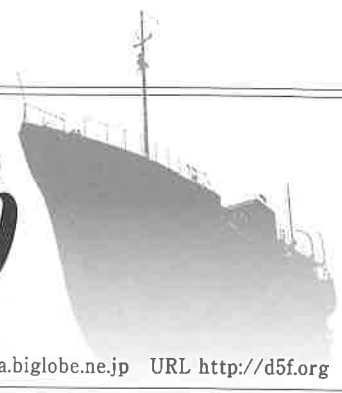
2015.11.01
No.390

(11・12月号)

発行：公益財団法人 第五福竜丸平和協会

連絡所：東京都江東区夢の島2-1-1 〒136-0081 第五福竜丸展示館内

Tel.03-3521-8494 Fax.03-3521-2900 E-mail : fukuryumaru@msa.biglobe.ne.jp URL http://d5f.org



戸島さや野さんのヴァイオリンと高橋悠治さんのピアノ演奏。毎回のコンサートには(株)タカギクラヴィアのご厚意によりニューヨーク・スタインウェイのピアノが提供される。撮影・大津伴絵

秋深まり、展示館への修学旅行見学やコンサート企画

毎年めぐり来る久保山忌(九月二三日)、展示館には多くの人びとがつどい、さまざまな企画がおこなわれます。それは秋の訪れを実感する節目でもあります。

九月は修学旅行シーズンに入り社会科見学で来館する小中学生も増えにぎやかな雰囲気は館内にひろがります。

七月一六日に始まった被爆70年アート企画「新井卓ダゲレオタイプ銀板写真展(竜の鱗―アトミックエイジのミニユメント)は一〇月一二日に終了しました。

第五福竜丸にヴァイオリンとピアノがひびく

一〇月一〇日、「ひびきあう福竜丸のしらべ」コンサートが開かれ、二〇名の入場者、スタッフなどをふくめ一四〇人が、穏やかにのびやかに、特徴あるリズム感にあふれ、ときに厳しく奏でられる美しいヴァイ

オリンとピアノの音楽を堪能する一夜となりました。

二〇〇六年いらい六回目となる展示館コンサートは、若いヴァイオリニスト戸島さや野さんとピアノニスト・作曲家の高橋悠治さんによるデュオが実現しました。

曲目は、バッハの「ヴァイオリンと通奏低音のためのソナタ長調」(BWV1021)ではじめられました。つづいてのベラ・バルトックのルーマニア民族舞曲は、棒踊り、飾り帯の踊り、ふみ踊り、角笛踊り、ルーマニア風ポリカ、速い踊りの六曲からなり明るい楽曲がくりひろげられます。

前半最後はレオシュ・ヤナーチェクの「ヴァイオリンとピアノのためのソナタ」です。第一次世界大戦勃発のころにつくられ、モラヴィア民謡や民族音楽の採集・研究に没頭した作者の独特の楽曲、悲痛な感情、暗い

(2めんにつづく)



思いを吐露するなかにわずかに光がほのみえるような音楽でした。
後半は、高橋悠治さんのピアノソロ作品「水に走る影」(2014)が演奏されました。三曲からなり第一曲は「折れ線の方向、二度と四度音程、絡まる線と崩し」、二曲は「単旋律」、三曲は「左右別なうごき。拍子のない自由な音楽」(作曲者による)から構成され聞き手を異次元の世界に誘うかのようでした。
プログラム最後は、伊福部

高橋悠治さんから 寄せられた言葉

1954年第五福竜丸についてはラジオのニュースで聞いた。その後の経過も新聞で読んだ。1962年にはヘルベルト・アイメルトの作った『久保山愛吉の墓碑銘』という電子音楽が何度か放送されたし、当時は自分でもNHKの電子音楽スタジオでしごとをしていたから、朗読と声を電子的に変形した不気味な響きは忘れても、「アイキヒ・クボヤマ」という呪文のようなくちかえしは耳についている。ギュンター・アンデルスが久保山愛吉の墓碑銘をドイツ語に訳したテキストと説明されている

が、元の日本語の墓碑銘をだれが書いたのだろう。アンデルスには「橋の上の男—広島長崎日記」という本があり、焼津に行って久保山愛吉の遺族とも会っているし、原著には広島に原爆投下したパイロットのクロード・イーザリーとの往復書簡が入っている(とくに絶版になった日本語訳には入っていない)。「ヒロシマの橋の上で」はルイージ・ノーノの作曲もある(『いのちと愛の歌』1962年)。

船が残されていることは最近まで知らなかった。廃墟は芽吹き、廃船は方舟になるのか。芸術作品は、現実の複雑さと繊細さにはおよばないだろう。

昭の「ヴァイオリンとピアノのためのソナタ」(1985年)です。福竜丸と伊福部と

感に思わず引き込まれる一、三楽章と抒情性あふれる旋律美のコンティナーレが印象的でした。すばらしい作品、演奏に大きな拍手が寄せられました。会場には伊福部玲さん(作曲者の息女で陶芸家)もみえました。
アンコールはエリック・サ

テイの「シテール島への船出」。静かな曲の流れに心が満たされ、穏やかな気分になるころには館外はすっかり暗くなり客席正面のガラスに映る第五福竜丸の姿と曲想を重ねながら聴かれた方も多かったのではないのでしょうか。

この日のコンサートを契機に初めて展示館に来館された方も多く、参加者からたくさん感想文が寄せられました。(Y)

コンサートの感想から

- ◎小さな会場、大きな船の下でいい感じで鑑賞できました。
- ◎バルトークと高橋さんの曲を目当てにきたのですが、ヤナーチェク、伊福部もすごくよかったです!
- ◎コンサート会場が「外側」であるとともに「内側」であると思った。バルトーク、伊福部など国家の「内側」にあつて、しかし民族音楽を研究することによって国家の「外側」にいかうとしたと感じた。
- ◎よい演奏を落ち着いた館できけて幸せでした。音楽を楽しみながら生きていくことの

かけがえのなさを、第五福竜丸の映るガラスを見ながら確かめたひとときです。

◎福竜丸の下で聴く音楽、ポランティアによるお茶のおもてなしにも、心あたりました。手作り感のあるイベントでした。

◎この場所で聴く音は、別の行動をしなければならぬ気持ちにさせられます。

◎迫力のある演奏でした、ルーマニア民族舞曲は、知らない曲なのに初めてではないような懐かしさを感じました。

◎音響が思った以上に良く、楽しい時間を過ごせた。有機的な曲や変節の感じられる曲が、この場所には似合っているのだと思う。

◎高橋悠治さんのピアノは透明で水玉のように軽く心にひびき、戸島さんのヴァイオリンで元気ができました。

◎展示館でのコンサートは福竜丸もいっしょに聴いているような気持ちになります。

◎ひびきあうすてきなコンサートありがとうございました。ひびきあう音楽にひたることができました。

マーシャル諸島発

「核兵器ゼロ訴訟」

竹峰誠一郎

われらマーシャル諸島民は、核兵器から壊滅的で回復不可能な被害を受けてきました。地球上の誰も二度と我々のような悲惨な経験をするこゝとがないよう、たたかっていくことを誓います」（トニー・デブルム外相）。

二〇一四年四月、マーシャル諸島共和国は、国際司法裁判所（ICJ）に核保有九カ国を訴える行動に出た。米・口をはじめ核保有九カ国が、核不拡散条約（NPT）第六条に規定された核軍縮交渉義務などに違反していると、核兵器の全面的かつ完全な軍備縮小を求めたものである。米政府を相手に、米国の連邦裁判所にも同様の訴訟を起こした。

人口わずか五万三〇〇〇人の極小国である、言わば国際社会の「蟻」であるマーシャ

ル諸島が、核兵器の犠牲を受けてきた国として、核兵器の全面的かつ完全な軍備縮小を求め、核保有国の「巨象」に立ち向かう。

だがマーシャル諸島共和国は決して反米の国ではない。同諸島のクワジェリン環礁には、米軍ミサイル基地が置かれ、迎撃実験が実施されたり、核弾頭搭載可能な大陸間弾道ミサイル「ミニットマンⅢ」の実験などが今なお行われたりしている。マーシャル諸島の国家予算の六割は米政府からの歳入で賄われている。対米関係の観点から「提訴は取り下げるべき」との主張も当然マーシャル諸島内にはある。それでも提訴に踏み切った背景に、放置されてきた核実験被害をめぐる問題がある。

*

二〇〇〇年九月、マーシャ

ル諸島政府は、米議会に核実験の追加補償措置を求める請願を提出した。それから一五年が経過したものの、核実験補償は「完全決着」済みであるとされ、米政府側の反応も鈍く、マーシャル諸島内には諦めが広がる。核実験場とされたビキニとエニウエトク両自治体が、自らの土地が汚染されたことに対する補償を求めて独自に米連邦裁判所に提訴したが門税払いとなった。

核実験補償をめぐる問題が何らの進展を見せないなか「核ゼロ訴訟」は提訴された。

しかし「核ゼロ訴訟」は、全人類に向け、将来繰り返し返さない証を求める行動である。「マーシャル諸島が提訴をしたのは、私たちがこの兵器が悪であることを知ったからです。わたしたちは辛い経験をしたからこそこの提訴ができ、それを進めるだけの権限があると思うのです」「核実験の経験からただ一つ良いことが起きるとすれば、私たちが核の体験を世界とわかちあひ、世界が核廃絶を確信できるよ

うお手伝いすることです」と、二〇一四年二月、ウィーン

でトニー・デブルム外相は演説した。

*

「核ゼロ訴訟」は、終わりのなき核被害を生きる現在のマーシャル諸島の人びとの生活を支える保障、あるいは過去の核実験被害に対する償いを求める内容ではない。自らの土地に戻れないロンゲラツプ環礁選出の国会議員ケネス・ケデーは、「放射能の問題、これこそマーシャル諸島が率先して取り組むべきことだ。なぜ九カ国を訴えるのか。仮に勝訴をしても、それで誰が利益を得るのか。それなら癌の治療をしてくれ、土地を返してくれ」と「核ゼロ訴訟」に疑問を投げかける。軍縮よりも足元にある被曝問題にマーシャル諸島政府はもつと力を入れるべきであるとの指摘である。

そうしたなか、「核ゼロ訴訟」をめぐる見解の相違を越えて新たなNGOの動きも小規模ながらある。自分たちを取り巻く核問題への理解を深め、お互いに議論する場所を作ろうと、複数のNGOが呼びかけた会合が開催された。ま

たその後、新たなNGO「リーチ・ミー」(REACH-MI)が立ち上がり、マーシャル諸島が抱える核実験の問題を共に学びあひ、ネットワークを広げ、アメリカの市民らに直接訴えていこうと計画する。

「核ゼロ訴訟」の今後、さらに被曝地のこれからの左右する、マーシャル諸島の国政と地方の一斉選挙が一月に実施される。(たけみねせいいちろう/明星大学教員、*新著に『マーシャル諸島—終わりなき核被害に生きる』新泉社刊)

広島で核被害者フォーラム

一月二一日から二三日まで広島市で世界核被害者フォーラムが開催される(於・広島国際会議場)。

主催は同フォーラム実行委員会。ウラン鉱山、核実験被害、広島・長崎被爆者、原発被害者など内外から被害者、専門家、運動家が参加し、報告と討論を重ねる。「世界放射線人権宣言」を広島から発表する。

絵本
「ぼくのみたもの」ができたよ
みんなはねえねえ

昨年 大石又七さんのお話を
うかがった。
第五福竜丸
まて 福丸
びきに水爆実験から
60年たっても核と
福竜丸の問題は
今も続いているんだ...

市民集会で

後日はじめて
展示館に行き

存在

福島の人のことを思った

ふるさとに戻れない
ロビンズで島の人のことを
聞いて...

↑ TVで
NHK...

福島の
福竜丸から
風が吹いて
見えた気がした。

「福島の人のことを説明が
リアルで

展示館から
帰った後も
なせか
福竜丸が心の中に...

ある日
絵本の
場面が
ふかんふかん
と心に
たたく

すでに泣きな
絵本はあるの
だよ

最後の見聞きは
ロビンズと福島の
平和への
願いもこめて
福竜丸の
ほむ先へ
みゆき王を
描きました。

絵に
描いた
福竜丸に
描がせんせいの
いのちを



いのちのことば社刊 1600円+税

第五福竜丸の新しい絵本ができました。館内ショップでも発売中です

被爆70年 戦争も核もない未来へ 被爆者、支援者つどう

と、被爆者が抱える苦しみを訴えました。吉田一人さんは「核の傘に覆われていない日本の青空を次の世代に引き継ぐのが我々の役目である」と核廃絶に対する想いを語りました。

「受忍」とのたたかい

政府は民間の戦争被害は「すべての国民がひとしく受忍しなければならぬ」とし一部の原爆被害を除き空襲や沖繩などの戦争被害は切り捨てられてきました。被爆者は全ての戦争被害者と手を結び、補償獲得と、戦争も核兵器も拒否する姿勢を強く示しました。

不戦の誓い 新たに

戦後七〇年を迎え、継承をめぐる取り組みも活発です。第二部では高校生や大学生も登壇し継承の取組みを紹介しました。田中熙巳日本被団協事務局長は、若い世代に体験を伝えたい、積極的に知ることをから始めてもらいたい、若者への期待を語りました。これまで被爆者は世代や国を超えて、戦争も核兵器もな

い世界を求め発信してきました。いま、二度と戦争をしないうという誓いが一層求められると訴えます。「ふたたび被爆者をつくるな」という叫び

に込められた願いは単に過去の被害に対する要求ではなく、まさに未来の世代のための痛切な想いだと感じられました。(H)

久保山忌句会 第二五回船員証受賞作品

遺言碑の肩の居ごこち秋あかね

飯田史郎

秋晴れの九月二三日、第三五回久保山忌句会が行われた。恒例の遺言碑へ参加者全員で献花し、第五福竜丸代表理事の川崎昭一郎さんと安田和也事務局長よりご挨拶を戴いた。その時、第五福竜丸が

心に揺さぶられ、展示館が完成した早々の暑い日、四歳と二歳の息子を連れ福竜丸に直面した。当時の夢の島は「ゴミの島」の名残がそこそこに見え、交通も不便だった。

来年開館四〇年を迎えるとい感慨深く聞いていた。

小さな木造船は真新しい槇肌を船体に詰められ治療直後の患者のようにも思えたが、善意ある人々の力で蘇ったのだ。正にこの朽ちかけて船が

不死鳥として羽搏く

第五福竜丸が被爆した時、わたしは小学六年。テレビのない時代だったが新聞が大々的に写真入りで報じたのを覚えて

入江に廃棄されているのが発見された直後から、俳句の仲間が度々吟行に訪れてお

久保山忌句会

形は度々吟行に訪れてお

り、NHK TVのドキュメンタリー「廃船」に紹介された。この縁で「久保山忌句会」がスタートした。

福島原発事故

想定外という言葉は何度も弄ぶように使われた福島原発事故に改めて「核」の恐怖が身近となり「ピキニの死の灰からフクシマの死の灰へ」の俳句作品の小冊子を発行した。

今回、句会での安田事務局長のミニ講演は紙芝居風に趣向を凝らし、核爆発の脅威を子供にも判り易く工夫され好評だった。その都度展示内容を替え、常に新しい息吹が注がれている第五福竜丸をもっともっと大勢の方にも訪ねてもらいたいと切に思う。(いいだ しろう／新俳句人連盟事務局長)



ニューヨークでの谷口さん(左)とサーロ・セツコさん(5月)。

連載③

晴れた日に 雨の日に

山村茂雄

て逃れたと聞きました。停車のきしみに引き出されるように亡き人への思いがよみがえります。前号にも記しましたが、年々積まれる被爆死者、殊に親しかった亡き人への想いは、己の齢を意識するこのごろ、その寂寥感はひとしおです。

*

広島に続いて訪ねた被爆七〇年の長崎。二〇一五年八月九日の長崎は夏の陽が高い空から降りそそいでいました。

「平和祈念式にはタクシーでなく市電で」の助言で松山町まで市電に乗りました。「福田須磨子詩碑」に立ち寄ったこともあって平和公園に上るエスカレーター前に着いたのは一〇時少し前、すでに入場が制限されていました。エスカレーター中継点にモニターテレビが設置されている説明を受け、モニターテレビ前の木陰に腰をおろしテレビの音声を聞くことにしました。

*

「被爆七〇周年長崎原爆犠牲者慰霊七〇周年長崎平和祈念式典」は、一〇時三五分被爆者合唱団の演奏で始まりま

した。七月末までの一年間に確認された三三七三人の死没者名簿の奉安。名簿の登載者数は全体で一六万八七六七人となりました。

一一時〇二分黙とう。街のすべての音が消えたかのような静寂のなかで祈りと誓いを刻むときがながれます。

田上富久市長の「平和宣言」は「憲法における平和の理念―長崎にとつても、日本にとつても戦争をしないという平和の理念は永久に変えてはならない原点」を強調し、「核兵器のない世界と平和の実現に向けて全力を尽くし続ける」決意を述べ、安保法案にたいして「平和の理念が揺らいでいる」懸念を表明しました。

被爆者代表谷口稜暉(すみてる)さんの「平和の誓い」。谷口さんは自己の被爆体験にふれた後「死体の山に入らなかつた私は、被爆者運動の中で生きていくことができた」と話し「今政府が進めようとしている戦争につながる安保法案は、被爆者を始め、平和を願う多くの人々が積み上げてきた核兵器廃絶の運動、思いを根底から覆そうとするも

ので、許すことはできません」と述べたのでした。大きな拍手が湧きました。モニターテレビ前の人もみんな拍手をしました。

翌日の地元紙「長崎新聞」は次のように伝えました。

「途切れがちな声に、死のふちからはい上がり七〇年間闘い続けてきた男の執念がにじんだ。(多くの人たちがつないできたナガサキの声。語り続けるのは生き残った被爆者の使命だ)へまだ終わりにやない核兵器のない世界を見届けるまで声をからす」。

*

一一時半過ぎに閉式。モニターテレビを視聴していた何人かと話しました。京都から来た若者たちは安齋育郎さんの講義を聞いたと言うので立命館の学生と分かりました。坂を下りてきた七〇歳代の女性が話してくれました。「こんなに大勢の方が参加されて」「原爆病院に入院中の夫に会いにゆくの、お若い方が多かつたこと、貴方様と話したことなどを伝えます」と言われるのです。報道によれば式典参加者は三万人を超え

たといいます。

かつて八〇年代後半の頃、日本原水協代表理事田沼肇さんに同伴して式典に参列したことがあります。そのころ田沼肇さんは神経難病「進行性核上性麻痺」を発症され、立ち居、歩行不自由の兆候が表れていたため、私が介添して参列でしたのです。その折の参列者はそれほど多い状況ではなかつた記憶です。

*

人の流れがまばらになつたのを見計らつて、平和祈念像前の献花台を巡り、長崎被災協事務所に立ち寄りしました。

事務所には、田中熙巳日本被団協事務局長が先着していました。事務局の横山照子さん、柿田富美枝さんも交えて谷口さんの発言と参列者の拍手に話題が及んだところに、首相懇談会を終えて稜暉さんが戻ってきました。襟もとを緩める谷口さんに「昼食は」と、柿田さんが問いかけました。稜暉さんの注文は「カレーライス」。届いた出前「多かつたら手助けしますよ」とのいたわりを受けながらも完

(7めんど下につづく)

高知県室戸の 元マグロ漁船員を追う 「放射線を浴びた X年後2」が完成

テレビドキュメンタリー番組「わしも死の海におった」から足かけ一二年。伊東英朗監督（南海放送）の「放射線を浴びたX年後」（二〇一三年）の第二弾が完成しました。第五福竜丸が水爆実験で被災した一九五四年暮れまでに、少なくとも八五六隻の漁船等が放射能汚染魚を漁獲していることがわかっています。しかし一九四六年以来八〇年代まで米英仏によりおこなわれた太平洋実験による被害の全貌は明らかにされていません。



聞き取りをする川口さん（右）

められることなく、若くして病を発症し亡くなった漁船員たちが県内にいることを突き止めました。前作では、ゼミナール顧問の一人・山下正寿さんの三〇年にわたる調査に触発され、黙々と被災者を訪ね歩く伊東監督が印象的でしたが、本作では被災者遺族・川口美砂さんに焦点が当てられます。室戸のマグロ漁師だった川口さんの父は、三六歳の若さで亡くなります。映画を観て「もしかしたら」と、父の死の理由に核実験被害を重ねた川口さんは、当初は現地リサーチャーを務めるつもりで聞き取りを始めたといえます。川口さんの行動は同じく被災者遺族の漫画家・和氣一作さ

んを動かし、元マグロ漁船漁労長・山田勝利さんの活動をささえます。

早逝した漁船員の遺族に「あいつは大酒飲みだったから」という周囲の冷笑が突き刺さるのは、第五福竜丸乗組員も同様でした。当時多くの人が差別を恐れて、船員手帳のページを破いたり、本籍を室戸から移したと証言する山田さんの「誇りをもって死ぬる生き方を取り戻したい」との言葉が、重く迫ります。かつて高校生調査の原点ともなった、室戸水産高校生・谷脇正康さんの親族の悔恨も時を経て、なお深まっています。胸を打ちます。あの時、もつと真実が伝えられていた

ら、と。

上映後川口さんは知れば知るほど、広島・長崎の被爆を知りながら核開発を続け海を汚染した核保有国への憤りがわいてくると言います。伊東監督も、なぜ遺族が自ら被害を証明しなければならぬのか、なぜ国家やメディアがその担い手にないのかを悩んだる思いを披瀝しました。

第五福竜丸平和協会でも俊鶴丸調査以来の科学者の研究や、核実験場とされたマーシャルの人びとの被害実態を研究者と協働しながら、被災船乗組員の被害検証を続けていきたいと考えています。（一）
*「X年後2」は一月より愛媛・東京ほか順次公開。

食。掛ける言葉をためらわせるものがありました。

ここに生きる。
ここで生きる。

「生かされた今に生きる」八六歳の長崎原爆被災者協議会会長谷口稜暉。

被爆七〇年八月九日、その日の長崎です。

*

これからNHKの番組に出演するという田中熙巳さんと駅ビルの食堂で皿うどんを。私は長崎県立美術館で開催中の広島・長崎美術館平和発信事業「竹田信平アンチコメント」展に向かいました（この項つづく）。

（やまむら しげお／第五福竜丸平和協会顧問）

* BOOK REVIEW *

日本はなぜ核を手放せないのか 太田昌克著

核密約報道で名高い共同通信・太田昌克氏の長期連載「原子力時代の死角」をまとめた新著。「日米（核）同盟」（岩波

新書）と併せ読むと、「平和利用」の名の下に、原発導入の源流が浮き彫りにされる。

歴代繰り返し組上にのぼる日本の核保有オプション、同盟の証としての核配備、非核国日本への核持ち込み、ビキニ二事件を経験しているにもかかわらず、国策として打ち出された核燃料サイクルなどな

ど、あらためて核をめぐる裏面史に慄然となる。

国際社会が凝視する、日本が保有するプルトニウム48・7トン、「三・一一」による被災者一〇万人はいまだ故郷に帰れない中で原発回帰と核抑止信奉…。本書が告発する核をめぐる現実には深刻だ。（岩波書店刊）

久保山忌につどう



爽やかな秋晴れのなか、今年も無線長・久保山愛吉さんの命日に当たる9月23日には、多くの人びとが平和への思いを深めました。

久保山忌句会、平和を語る集い、東京原水協などが主催する学習会参加者がそれぞれ「原水爆の被害者は私を最後にしてほしい」と刻まれた記念碑に献花し、川崎昭一郎協会代表理事が挨拶をしました。また築地にマグロ塚を作る会には大石又七さんも二年ぶりに出席し、近況報告や今後の課題を語り合いました。平和を語る集いでは、展示館ボランティアの有志が地球46億年を1年に縮めた地球カレンダーと超訳版「ラッセル＝アインシュタイン宣言」を朗読しました。地球誕生からの年月のなかで、人類が核を保有し環境破壊しているのは、ほんの数秒のこと、ヒトとしてそのことを考えよう、紛争解決の手段は戦争ではない!とよびかけました。

京都で西脇展開かる

立命館大学国際ミュージアムのミニ企画として「放射能がふってくる～ビキニ事件と科学者西脇安」展が9月12日から30日まで開かれました。

西脇さんは、福竜丸被災当時は大阪市立大学医学部の助教授で、大阪市場に入荷した福竜丸のマグロ検査を依頼され、その被ばく線量の高さに驚き、焼津に向いて船体や乗組員を測定、深刻な事態を警告しました。

また焼津から大阪に戻った直後にアメリカの原子力委員会にあてて、核実

験のデータなどを提供するよう求める手紙を送ってあります。

同展示は、ビキニ被災60年の2014年に開かれた東京工業大学での企画展のパネルを中心に、第五福竜丸模型をはじめ展示館所蔵の現物資料、死の灰、マグロろうこ試料、ガイガーカウンターなどと福竜丸関係の展示パネル10点などで構成されました。

9月26日には記念講演もたれ、東工大名誉教授の山崎正勝さんが、「科学者・西脇安」について詳しく話され、福竜丸の被ばくの分析や、日本の科学者の解析した「死の灰」のデータをヨーロッパで報告し、水爆の仕組み解明の契機となったことなどを講演しました。展示館の安田和也学芸員も「西脇博士と展示館」についてコメントターとして報告しました。(写真は展示風景・同大ミュージアム提供)



巨大かぼちゃに歓声

新井卓展ではふたつの映像が終日上映されました。ダゲレオタイプの制作風景を記録したもの(撮影編集・大津伴絵)と新井卓監督の「49PUMPKINS」です。これは1945年、広島・長崎への原爆投下に先立ち、日本各地におとされた模擬原爆「かぼちゃ爆弾」から着想された作品です。B25爆撃機の飛行と高所から落とされ、潰れる巨大かぼちゃのようすに、



見ている子どもたちからは大歓声が上がります。そして何か悲しみも感じるようでした。

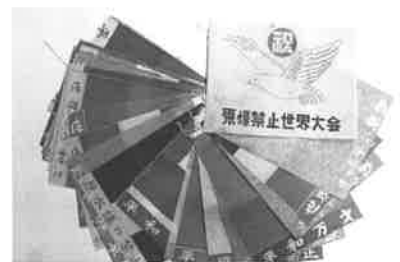
ご寄贈ありがとうございます ございます

国立広島原爆死没者追悼平和祈念館より被爆70周年記念事業で刊行された『しまつてはいけない記憶—被爆体験記集Ⅰ』をご恵贈いただき



ました。被爆の体験を本人ではなく、祈念館職員が聞き取り代筆された50編です。被爆前の生活や被爆時の臭いや色の記憶、地名などを聞き取りと事実確認を重ね丁寧に編集されています。広島に献呈された折鶴の再生紙を使用した造本で、ぜひ手にとって読んでもらいたい証言集です。希望される方は展示館内で閲覧できます。

広島大学の川口隆行さんより、第一回目の原水爆禁止世界大会で使われた万国旗を寄贈いただきました。これは1955年8月6日夜に平和広場(慈仙寺に建てられた平和塔前広場、現在平和記念公園内)で開かれた世界大会関連行事、「歓迎と祈りの国民大会」の舞台で飾られたものと推測されます。貴重な資料として保存・活用させていただきます。



事務局だより

会計担当が中村勇太さんから、松村十四枝さんに交代しました。今後ともよろしく願います。